パーキンソン症候群

パーキンソン病に似て、体を動かしにくくなる病気はいくつもある。で、その原因が違えば、治療法も異なるのだ。

というのに、78歳のA子さん。「センセ、私、パーキンソン病みたい。すぐにでも薬を飲みたい」と、朝の早くから大騒ぎだ。「約2カ月前から、歩きにくくなった。特に最初の一歩が出にくい」などと訴える。が、厄介なことになりそうな予感がする。パーキンソン病なら、そんな急に症状はでない。

でも、確かに、歩き方が少しヘンだ。パーキンソン病の患者さんに似て。小股でチョコマカと歩く。が、歩幅が広い。ペンギンのような歩き方といえばよいか。だが、表情も豊かで、手足のふるえもない。パーキンソン病とは原因の違うパーキンソン症候群だろう。

症状は、主に両側の足にみられる。パーキンソン病に似た運動障害である。高齢者で、急に発症した。ならば、原因として脳血管障害が考えやすい。すぐに、頭部のMRI（磁気共鳴画像）の検査をする。と、脳深部の細い血管の血流が悪くなり、一部が詰まったラクナ梗塞がいくつもみられるではないか。他に、脳の萎縮や腫瘍、水頭症などはない。となれば、A子さんの病気は、「脳血管性パーキンソン症候群」が疑わしいことになる。まずは、脳神経内科医にも診てもらおう。

しかし、まいった。A子さんには、どう説明しよう。パーキンソン病なら、ドーパミン補充療法が有効である。だが、血管性パーキンソン症候群には効果が期待できない。かといって、「あなたの病気に効く薬はありません」などと話すわけにもいくまい。

高齢者は、落ち込みやすい。気力が委えて不活発になれば、ますます運動機能は衰える。「リハビリを頑張れば良くなるかも」と、先に少しは明るい光が見える話にしよう。

（石黒修三＝いしぐろクリニック・脳神経外科医：　4/18北國新聞掲載）